■oneといふ綴り

伝統のある綴りを守ることがいかに大切なことであり、価値のあることであるかを、一つの言葉の綴りの歴史をたどることによって考へてみることにしたい。

そこで、英語の“one”を取上げることにしたい。この言葉の発音は、今は〔w∧n〕であるが、『オクスフォード語源辞典』に拠ると、十六世紀には、〔ouni:〕といふ発音であることが解る。

“o(ou), n, e(i:)”といふ綴りを文字通り発音すれば〔ouni:〕となるから、“one”といふ綴りは十六世紀における“一つ”といふ意味の言葉である〔ouni:〕の発音を忠実に表したものであることが解る。

御承知のやうに、英語では、綴りの末尾にある“e”は今は全く発音されない文字になってゐる。だから、“one”の“e”も発音されなくなって〔oun〕と発音されるやうになった。この〔oun〕といふ言葉は、力強く発音すると、自然に〔woun〕といふ発音になる。現在の〔w∧n〕といふ発音は、この〔woun〕の変化したものである。

このやうに、“one”といふ言葉は、十六世紀以来、五百年の間に驚くほどの変化をして来たことが解る。然し、それにも関はらず、その綴りは少しも変化してゐない。その理由は一体どこにあるのか、考へてみたいと思ふ。

もしも表音文字が「音を表すのが目的の文字」であるとするならば、言葉の発音が変化したらその時点でその変化に応じた綴りに改めるはずである。ところが、〔ouni:〕といふ言葉は〔oun〕に変り、〔woun〕と変り、w∧n〕と変っても、その綴りは、初めの“one”といふ綴りを変へなかった。この事実は、「表音文字は決して音を表すことを目的とするものではない」こと、少なくとも、「音を表すことはそれほど重要なことではない」といふ事を意味してゐる。

もっとはっきり言ふならば、「表音文字は、〝表音〟といふ手段により、“思想伝達”の目的を果さうとして生れたものである」といふことである。“表音文字”とは言へ、文字といふものは“表意性”の方が“表音性”より大切なのである。だから、綴りを変へて発音を忠実に表しても、そのために“表意性”が損はれたら何にもならなくなる。だから、綴りを変へなかったのである。